



連載

ビブリア・トーク

—私のオススメ—

… 金子 格 (東京工芸大学)

夜明けのロボット (上) (下)

アイザック・アシモフ 著, 小尾美佐 訳

早川書房 ハヤカワ文庫 SF (1994) *

(上) 358p., 799 円+税, ISBN : 978-4150110635

(下) 351p., 799 円+税, ISBN : 978-4150110642

原題 : The Robots of Dawn

* 本稿執筆時点で品切れ



ロボット時代の夜明けだ!

そんな昨今, 本書のタイトルに目がとまった人は多いだろう。今回はアシモフ (Isaac Asimov) 著『夜明けのロボット』を取り上げたい。

ちょっと敷居が高い?

SF は読むがアシモフは読んだことがないという人は多い。私自身がそうだった。最初に読んだのは20歳を過ぎてから。理由はみなさんと同じだ。べたな「ロボット工学の三原則」、ロボットSFの元祖として君臨する仰々しさ、20世紀に書かれた多くのロボットSF作品、「鉄腕アトム」、「機動戦士ガンダム」が根本的にかかえる時代遅れの科学的な設定。はたして、20年以上も前に書かれたロボットSFを読む意味があるのか。そんな先入観は、代表作『われはロボット』を読めば霧消するはずだ。読まれた方はご存じの通り、ある意味これらはSF作品ではない。ロボットを実現する科学技術はほとんど語られないが、たとえ語られても「陽電子頭脳」が現実には存在しない技術であることは全然問題ではない。作品のフォーマットは推理小説である。人間同様の知能を持ち、「ロボット工学の三原則」という絶対的抑制を持つ架空の「ロボット心理」はその舞台装置。推理の前提条件として明確に提示されるからだ。ロボット心理というフィクションが明確に定義されてさえいれば、その機構は問題ではないし、アシモフが設定した推理トリックを現代でも、いや現代だからこそより自然に、楽しむことができる。

既視感のある世界

そして今回『夜明けのロボット』を取り上げる。実はこの作品は大変残念なことに在庫がなく古書でしか入手できない状態だ。だから、アシモフ作品を読んでもこれはまだ読んでいないという人が多いはずだ。本作品は『鋼鉄都市』『はだかの太陽』に続くロボット長編3部作の3作目、完結編だからだ。長編を読むのは骨が折れるし3部作の完結編から読む人はいない。

舞台は現在の地球とはまったく異なる遠い未来だ。人類はロボットを最大限活用し、宇宙に進出している。一方地球に取り残された多数の人々は、変化を恐れロボット技術を敬遠し、過密と貧困にあえいでいる。この2つの社会は人種、政治、文化、環境、技術、貧富において分断され、対立を深めている。およそ現実の現代社会とは似ても似つかない異世界であるが、読者は奇妙な既視感を覚えるだろう。アシモフ世界が現実の国際社会にヒントを得たのは明らかだ。成功と失敗、高所得社会と低所得社会、先進社会と未開発社会、そうしたさまざまな対立の様相。まったくの異世界にそうした現代社会の様相の相似形を構築することで、アシモフは現代社会のひずみをより純粋に再現している。

推理小説であり哲学書

さて、私はどんな話を語りた欲望と戦っているが、推理作品のあらすじを述べるのはさすがに無粋だ。「Book」データベースにあるあらすじのみ紹介すると、以下のように書かれている。「かつて銀河系へ進出した地球人の末裔が宇宙国家連合を形成

し宇宙をわがものとしている現在、地球は孤立し、宇宙進出もままならない。その地球に、宇宙国家連合の指導者格である惑星オーロラが助けを求めてきた。人間そっくりのヒューマン・フォーム・ロボットの破壊事件が起こり、その捜査を刑事ベイリに依頼してきたのだ。ただ1人の容疑者はそのロボットの生みの親ファストルフ博士。ベイリはさっそくオーロラへ赴くが」。^{☆1}これだけでは状況がやや分かりにくいように思うので、若干補足しよう。

主人公ベイリは地球の刑事だ。地球人はロボット技術を忌避し過密と資源枯渇にあえいでいる。そのベイリが宇宙国家の要請で事件の捜査のためオーロラに赴くが、そこでベイリに協力するのが1台のヒューマン・フォーム・ロボットだ。その設計製造は非常に困難で、宇宙国家にも天才ロボット科学者の手により作られた数台しか存在しない。その1台がベイリと助け合いながら事件を解決していく、というのが物語の大筋だ。

アシモフは推理小説の基本に忠実な作家であり、謎を解くための前提は結末を提示する前に明確に示すことを心がけている。読者による推理を排除するような推理はアシモフの最も嫌うところだ。設定がどれほど現代の科学的知見とくい違っていても、物語中の前提を受け入れれば、十分に推理と見事なトリックの種明かしを楽しめる。

2人(1人と1台)はそれぞれロボットと人間という特徴を活かして対話をしながら推理を進めるが、その緻密な議論は、プラトンの「プロタゴラス」を読んでいるようでもある。ロボットと人間の哲学対話も本書の大きな魅力だ。

アシモフの宿題

無論、これは純粋にエンタテインメントである。「ロボット工学の三原則」は架空の設定であり、あまりに概念的だから近い将来にこのような形で人工

知能上に実現できる可能性は1%もないだろう。にもかかわらずこの前提に基づいた無数のアシモフ作品は、貴重な思考実験だ。そう遠くない将来、我々は機械自らに人間の生殺与奪、より守るべき人間と犠牲にすべき人間の選別、そして組織や社会における裁定をゆだねざるを得ない。そのときに機械にどのような倫理的規範をいかにして与えるべきなのか。その結果機械の判断にどのようなジレンマが生じ得るのか。いかなる想定外の結果を生じ得るのか。そのあらゆる状況を考え抜いたという点で、アシモフ作品から得ることは多い。さらに、本書を読み終えた読者は重い問いかけをされたことに気づくだろう。アシモフが読者に残した宿題でありその答えはこれから探さなければならないのだ。

さて、本書は3部作の完結編である。発表順に読むのが普通だが、本書から読んでも問題ないと思う。アシモフは親切な作家であり、物語の設定は1冊ごとに説明しながら物語が進む。順序を気にせず本書から読んでも物語についていけないということはない。私自身本書を最初に読んでから3部作の1～2作を読んだ。後でほか2作を読む際に先を知っている、特に主人公が絶対に死なないことを知ってしまった、という当然の問題があるが、その点は3部作であることを知った時点で手遅れだ。

最近は日常の問題に忙殺され未来小説など読む気にならないかもしれない。しかし、日常的な現実的な問題に悩んでいるときこそ、遠い未来を展望する価値がある。アシモフ自身ロシア革命の亡命一家に生まれ、作品の随所にはそうした困難に直面した人々への愛情が感じられる。今絶好調という人も、日常的問題で悩んでいる人も、本書を読めばきっと新たな活力が湧くことだろう。

(2016年10月13日受付)

^{☆1} <https://www.amazon.co.jp/dp/4150110638>

金子 格 (正会員) itaru-k@acm.org

東京工芸大学 准教授。博士(早稲田大学 情報科学)。アスキー、GCL等を経て現職。チャベック、ベルヌ、クラーク、ウエルズなど古いSFも好む。